慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	色彩語による連体修飾の研究 : 色彩名詞と色彩形容詞の使用傾向について
Sub Title	
Author	黄, 宇陽
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2024
Jtitle	日本語と日本語教育 No.52 (2024. 3) ,p.158- 158
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20240300-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』52：158（2024.3）

〔大学院文学研究科修士論文〕

色彩語による連体修飾の研究
―色彩名詞と色彩形容詞の使用傾向について―

黄　宇陽

本稿は、色彩語の連体修飾について研究するものである。

現代日本語に使用される色彩語はこれまで多くの研究がなされてきたが、それらの研究は主に色彩語のメタファー表現をめぐるものであり、色彩形容詞が名詞を修飾する場合と色彩名詞＋格助詞「の」が名詞を修飾する場合の使い分けを捉える研究は少ない。たとえば、日本語において、基本色彩語（赤・青・黒・白）、黄色と茶色は語基を同じくする名詞と形容詞があり、どちらも連体修飾語になりうる（赤い花・赤の花）。このような〈色彩名詞＋「の」＋名詞〉と〈色彩形容詞＋名詞〉の連体修飾関係にある句との間にどのような違いがあるのかを明らかにするのがこの論文の目的である。

本稿の直接の分析対象は研究の蓄積の多い「赤・青」を除き、「白・黒・黄色・茶色」の色彩名詞と色彩形容詞である。まず、データを BCCWJ から集め、色彩語が使われる用例を先行研究の結果を検証しながら文脈とともに分析し、最終的には、それぞれ対になる色彩形容詞と色彩名詞が修飾語としての使用頻度、及びその意味（メタファー的な表現も含めて）を明らかにしようと試みた。また、「白・黒・黄色・茶色」の色彩名詞と色彩形容詞の使用状況にはどのような傾向が見られるのかについても分析した。

その結果、沢田奈保子（1992）の名詞は「指定」、形容詞は「非指定（限定と描写を含めて）」という説を援用すれば、「黒い」と「黒の」、「白い」と「白の」の使い分けを説明できる。つまり、「黒い」と「白い」は限定と描写の機能を持っており、被修飾語としては自然物に使われやすい。一方、「黒の」と「白の」の指定する機能が強く、被修飾語としては衣料をはじめ、生産物と比較的に共起しやすいことがわかった。また、婦人誌、専門書、教科書、新聞、広報などの情報を確実に読者に伝えることが求められるジャンルにおいては、「黒の」と「白の」の使用率が比較的に高い。一方、基本色彩語ではない名詞（黄色・茶色）と形容詞（黄色い・茶色い）の使用頻度は、傾向が異なる。基本色彩語では名詞よりも形容詞のほうが使用率が高かったが、「黄色の」の使用率は「黒の・白の」よりも高く、名詞が形容詞よりも優位であった。これが茶色になると、色彩名詞「茶色の」の使用率は形容詞「茶色い」よりも使用率はかなり高い。そして、「黄色・茶色」に関しては色彩名詞と色彩形容詞で使い分けがほとんどなくなっている。これは、色彩形容詞の「黄色い」と「茶色い」は比較的新しい造語であるからと考えられる。

このように、連体修飾の観点から見た色彩語の名詞・形容詞の用法の差には、その語の歴史的な成立時期の違いも関係する可能性があるという見通しも得られた。